

マーケット概況（2025年7月）

7月の債券相場は、前日に発表された米国経済指標の悪化を受け買い優勢で始まった。6月の日銀短観改善を受けて売られる場面もあったが、順調な10年債入札の結果を受け、入札前に1.450%で推移していた新発10年379回債の利回りは一時1.405%まで低下した。その後は、3日の30年債入札が不調に終わったことに加え、参議院選挙を控え与党苦戦との報道から財政拡張懸念が強まると超長期債中心に売りが優勢となった。一方、8日の5年債入札を無難に通過し中期債は底堅く、イールドカーブはスティープニングした。関税政策によるインフレ懸念から米国債利回りの上昇が進むと超長期債はさらに売られ、20年193回債はカレントとして1999年11月以来となる2.650%、30年87回債は1999年9月の30年国債発行開始以来最高となる3.200%まで利回りが上昇した。過度な財政拡張懸念が後退し、18日の国債買入オペの結果が堅調となると相場は一時反発した。しかし、23日に日米相互関税が従来想定より低い15%で合意したことが報じられると大幅安となった。一部報道で年内追加利上げ観測が高まると中長期債中心にさらに売られ、10年379回債の利回りは2008年10月以来となる1.605%まで上昇した。29日の2年債入札を順調に通過し、31日の金融政策決定会合で政策金利が据え置かれると月末にかけ下げ幅を縮小し、10年379回債は1.545%で今月の取引を終えた。

<短国市場>

7月の短国市場は金利上昇傾向で始まったが4日の3M1316回債入札では、9月末越えの担保玉確保から最高落札利回り0.4356%としっかりで、その後はショートカバーの動きから0.350%が取引された。9日の6M1317回債入札も0.4421%と前回入札比で6.0bp程度金利低下し、11日の3M1318回債入札でも0.4150%と金利低下した。18日の3M1320回債入札は0.4079%でしっかりだったが、月末にかけて早期利上げ思惑が再燃したことで、1Y1319回債は0.690%まで取引された。25日の3M1321回債入札は0.4396%と金利上昇したが、その後のセカンダリーでは0.435%が取引された。1Y1319回債も29日の2年債入札がしっかりの結果だったため連れ高し、0.640%まで金利低下して今月を終えた。

<一般債市場>

7月の定例地方債は、5年債・10年債ともに前月比2bpタイト化となり、5年債が国債カーブ対比+15bp、10年債が国債カーブ対比+16bpの条件決定となった。10年定例政保債は前月比2bpタイト化の国債カーブ対比+14bpの条件決定となり、政保債・地方債スプレッドは前月比横ばいの2bpが継続した。入札物の大阪府債は前月までと同様に定例債の起債レベルよりタイトな水準で条件決定されるなど、地方債カレント債は良好な需給環境は継続した。また、個人向け債を含む7月の事業会社債の発行額は2兆4,275億円(86銘柄)と7月としては過去最大だった前年に続き過去2番目の多さとなった。

◎ 主要債券月間四本値

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#379	1.450(1日)	1.405(1日)	1.605(25日)	1.545(31日)
#378	1.430(1日)	1.385(1日)	1.590(24日)	1.535(31日)
#368	1.190(1日)	1.170(1日)	1.370(25日)	1.305(31日)
#178-#179(5Y)	0.985(1日)	0.955(2日)	1.150(25日)	1.085(31日)
#192-#193(20Y)	2.350(1日)	2.305(2日)	2.650(15日)	2.540(31日)
#1311-#1317 TDB(6M)	0.435(9日)	0.420(9日)	0.510(28日)	0.500(30日)
#1315-#1321 TDB(3M)	0.430(4日)	0.350(9日)	0.450(25日)	0.435(29日)